

第3章 白岡市の歴史文化の特徴

1 歴史文化の特徴

当市のこれまでの文化財調査によって浮かび上がってきた情報を、文化財類型や時期別に整理し、地勢等と合わせて白岡市の歴史文化の特徴を以下のようにまとめました。

I 二つの鎌倉街道と中世寺社群

「鎌倉街道」の伝承をもつ道筋が二つあります。一つは、市域東部を縦貫するように残された鎌倉街道中道に比定される道筋で、沿線には中世起源の寺社が並びます。この道筋を基に、日光御成道が整備されました。もう一つは、小久喜の鬼窪尾張繁政館跡や寿楽院前から西進して、荒川の自然堤防沿いに南下する道です。

鎌倉街道中道に比定される道筋は、沿線に安楽寺、大徳寺、正傳寺、忠恩寺、上野田鷲神社、高岩天満神社など、中世起源の寺社が並びます。この道筋を基に近世には、日光御成道が整備され、江戸から11番目の一里塚が置かれました。

もう一つの、伝鎌倉街道とそれと合流する篠津からの古道の沿線である、篠津・白岡・小久喜・実ヶ谷付近はかつて「鬼窪郷」と呼ばれていました。中世初頭、武蔵七党に数えられる野与党鬼窪氏が利根川筋と荒川筋の最接近点であり鉄生産の拠点であった篠津に目をつけ土着したことによります。鬼窪氏は、白岡支台ほぼ全域を勢力下に治め、血縁のある氏族は周辺に拡大していきます。この地域には、篠津久伊豆神社、興善寺、正福院、白岡八幡宮などの寺社が並ぶほか、いくつもの館跡が連綿と続いて築かれていることが発掘調査の成果からわかってきました。

このように二つの鎌倉街道とその周辺に並ぶ中世由来の社寺は、白岡市の中世以降の歴史文化の特徴をよく示しています。

II 新田開発を巡る用排水路の開削と川の立体交差

市域の水田地帯は緩傾斜で、河川後背湿地や沼地が多く排水の難しい土地でした。用排水路の開削で、水路同士を交差させる必要性から採用された「伏越」や「背越」などの構造は、開削や管理に大きな労力が必要でした。江戸時代の新田開発の歴史は、用排水路の開削と川の立体交差と排水を巡る争論の歴史であったといえます。

市域は全体に勾配のゆるい土地柄です。水田地帯では、4,000分の1といわれる緩傾斜で、河川後背湿地や沼地が多く排水の難しい土地でした。

先人は、排水路を掘り、後背湿地を水田として開発してきました。田が水につからないように堤を築いたり水口の開閉をしたり日常の管理が重要で、ひとたび出水すると、堤の上郷と下郷との間で堤を切るか切らないかの騒動が持ち上がります。しばしば争論となり、お上の裁定

を仰ぐことになります。こうした争論に関する絵図や裁許状は当時の水利を知る上で貴重な資料となります。

Ⅲ 排水の苦勞を乗り越えてきた低地の暮らし

市域は低地を中心に排水に苦勞してきた地域です。特に大山地区は、柴山沼や皿沼、南の元荒川と北の星川に挟まれた土地柄もあり、絶えず排水に苦勞してきました。しかし、水のもたらす災いや不便さを乗り越え、水を味方につけてきました。そして、その魅力を引き出して、水とともに暮らしてきました。

柴山沼を囲む柴山、荒井新田の家々では「水塚」が築かれ、水害に備える風土が形成されてきました。この地域の水塚は、元荒川や星川側より柴山沼側に発達し、沼側の塚の方が高い傾向が見られることから、河川氾濫以上に柴山沼の内水氾濫に備えたものと思われます。

柴山沼や皿沼周辺には「掘上田」が発達し、掘り潰れの水路は集落内まで引かれ、田畑との往復や作物の運搬などに使われていたようです。水害時にはこの舟が物資の輸送や避難に使われたといえます。また、沼周辺の入会権に関する争論裁許絵図などが残されていることから、古くから、周辺各村が利用することのできる範囲などが決められていたことがうかがえます。特産の梨栽培が盛んな理由も、地下水位が高くみずみずしい梨がとれることによります。

Ⅳ 新井白石の残した歴史文化

6代将軍徳川家宣の儒臣として旗本となった新井白石は、野牛村に後背湿地の排水路「白石様堀」を開削させ、見事な美田に変えたほか、救荒対策として「郷倉」を設けました。

こうした善政により村人も白石を慕い、毎年白石の命日である5月19日は「筑後様まつり」として継承されています。

新井白石ゆかりの文化財は、野牛地区の各所に認められます。村の鎮守の久伊豆神社の扁額は白石が正徳の朝鮮通信使の製述官李磻^{イヒョソ}に頼んで揮毫してもらったものを下書きとしていますし、白石が村方の争いごとに裁定を下した文書が残されているなど、村政にも大きな影響を与えていたようです。

野牛村の名主家には、白石自筆の漢詩のほか白石の肖像画を奉納した新井成美（白石5世の孫）の漢詩など4点を表装した掛け軸が伝えられており、白石やその後の新井家が領地の野牛村を大切に思い、名主等村方とも交流していたことを示すものといえます。

「筑後様まつり」は、昭和10年代に途絶えますが、近年、途絶えていた祭りが復活したことは、地域の歴史文化の興隆に大きく寄与するものとして評価に値します。

新井白石の事績や白石に関わる文化財は、野牛にとどまらず広く白岡市全体の歴史文化に大きな影響を与えているといえます。

V 篠津天王様の祭礼に見る近世町場の面影

篠津は、野与党鬼窪氏の本拠地として開発され、近世を迎えると日光街道粕壁宿と中山道鴻巣宿とを結ぶ脇往還の町場として栄えます。また、元荒川の水運を利用して、近郊の木綿などの流通拠点となったことが知られています。町場「篠津」の繁栄は、篠津の天王様の祭礼にその面影を残しています。

篠津は、元荒川の水運を利用して、近郊の木綿などの流通拠点となったことが知られています。木綿・紅花問屋として隆盛を誇った「篠川」は地域経済だけでなく文化面でも大きな足跡を残しています。篠津久伊豆神社の社殿彫刻や優れた彫刻を持つ5台の山車は、町場としての篠津の潜在力の高さを示すものといえます。1村で5台の山車を持つ篠津天王様の祭礼は、単なる村祭りとしての域を脱したものと評価できますが、その背景には「篠川」の財力があつたことは疑う余地もありません。

篠津の歴史文化は、河川から得た砂鉄を原材料とした鉄生産に始まり、鉄と河川交通に着目した鬼窪氏の土着で大きく前進し、近世の物流や経済の発達に裏打ちされた商家「篠川」の出現で頂点に達し、「軍鶏」の彫刻で一世を風靡した立川金禄へとつながっていきます。

2 歴史文化の特徴から導き出されるテーマ

5つの歴史文化の特徴に共通し、時代や地域を超えた大きな背景として存在し、絶えず通奏低音のように流れているテーマがあります。これを「**水とともにあった人々の暮らし**」と表現することとしました。これこそが、白岡の歴史文化の根底にある特徴であるといえます。

このような白岡市の歴史文化の特徴を十分に把握し、保存・活用にあたっては、特徴を生かした取組を展開するよう配慮します。



白岡市の歴史文化の特徴